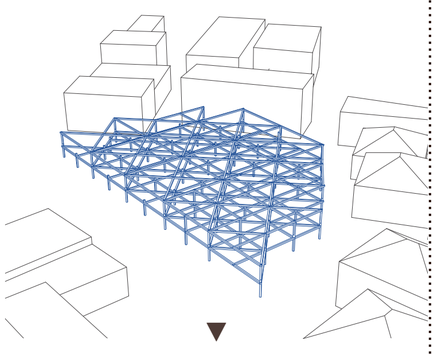
時のかけらを積み重ねる家

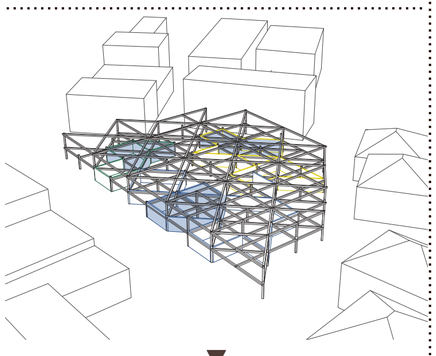
時に大切なものを淘汰してしまう「都市の大きな時間」と対峙し、ものや個人の「小さな時間」に価値を見出す。
時のかけらを積み重ね、「時間の境界」をまとうこの家では、今ではないいつか、自分ではない誰かの生活や記憶が流れ込んでくる。

00 プロセス　「骨格」と小さな時間の積み重ね方

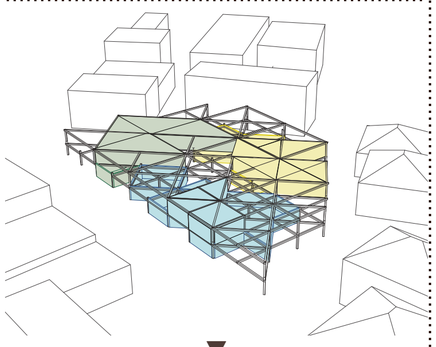
i. 路地を引き込むように「骨格」を設計



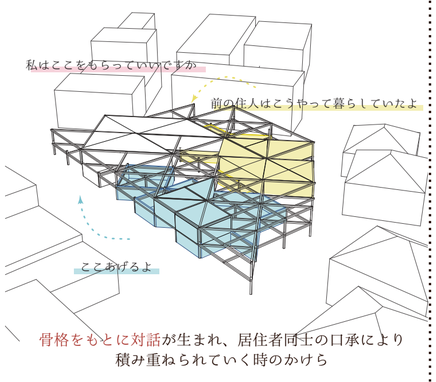
ii. 3 住戸それぞれの水回りを固定として設計する



iii. 住人 A,B,C が入居し、水回りを起点に
骨格に沿って部屋を決める

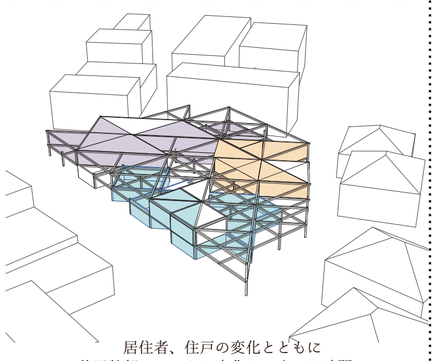


iv. 骨格は残したまま新たな 住人 C’ が入居する



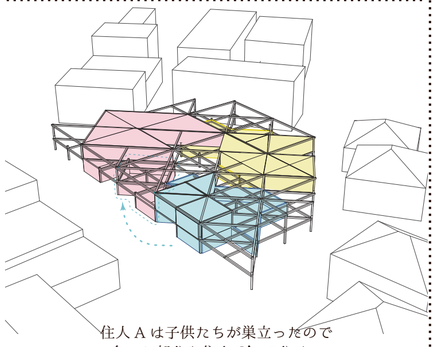
骨格をもとに対話が生まれ、居住者同士の口承により
積み重ねられていく時のかけら

v. 骨格を残し続ける



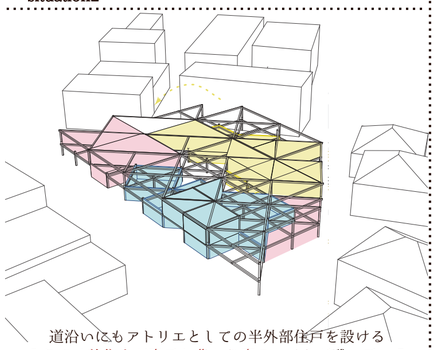
居住者、住戸の変化とともに
共用外部のかたちも変化し、小さな時間が
建築全体の変化に表れてくる

situation1

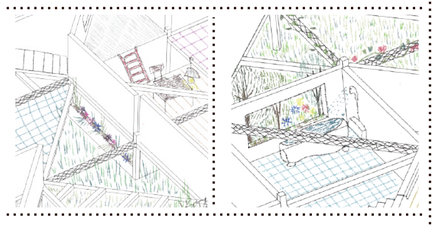


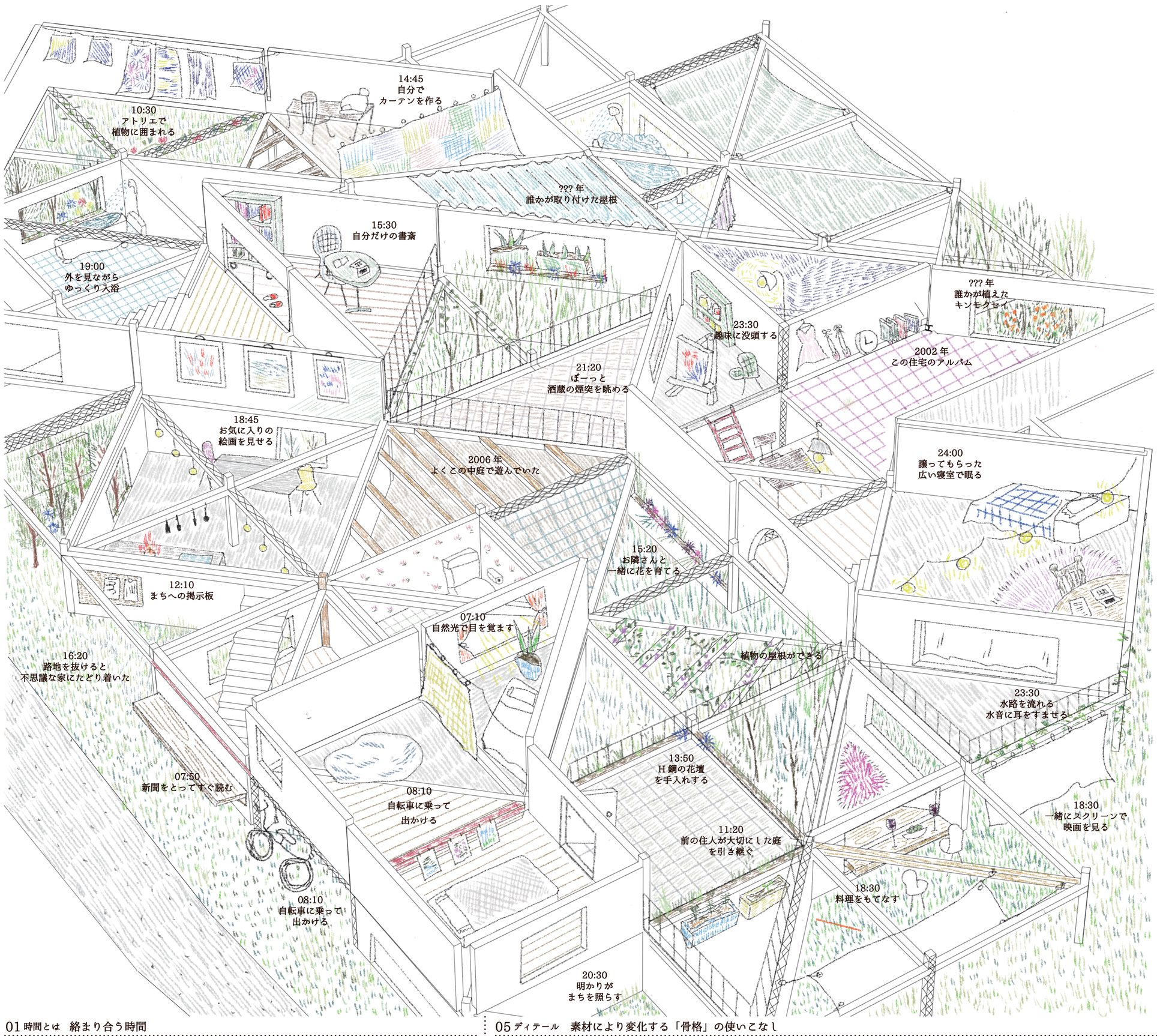
住人 A は子供たちが巣立ったので
余った部分を住人 C’ に分ける
そこには子ども達が暮らしたかけらが残っている

situation2

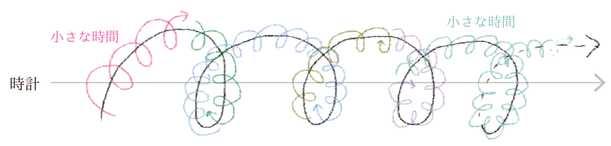


道沿いにもアトリエとしての半外部住戸を設ける
そこには前住人が育てた豊かな庭のかけらが残っている





01 時間とは　絡まり合う時間



時間を、時計のように一方向に流れるものではなく、土地や個人などたくさんの小さな時間が絡まり合う
スパイラル状に続いていくものであると捉える。
都市も家もスケールは異なるが、個人の小さな時間の集積でできている。

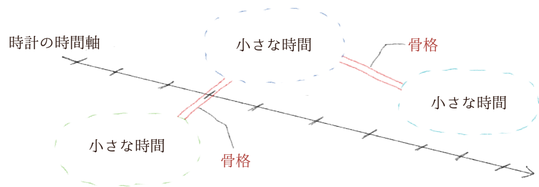
02 問題提起　個人の「小さな時間」に価値を見出す

新築を建てるために、戸建てが壊される。退去時に、アパートから全ての私物を一掃する。
人ひとりが死んだり、移住することによって住んだ痕跡は跡形もなく消えることの繰り返しにより、
都市の大きな時間からこぼれ落ちてしまっている個人の暮らした時間・物語があるのではないだろうか。
現在の都市や家には、「個人の小さな時間」に価値を見出すことが欠けていると考える。

03 敷地　ものをきっかけとした「小さな時間」

数多くの酒蔵をもとに人の営みが積み重ねられてきた西条町。
獣道など小さな営みの積み重ねでできた雑多な魅力がある。
その中には、引っ掛けたり、置いたり、「ものをきっかけとした小さな行為」を多く見ることができる。
どんなものにでも、そこには「小さな時間」を想像することができる。
また、三角形の空き地やＹ路地などがあり、路地の壁や塀を設計の要素の一部としても考える。

04-i 設計　小さな時間を単位とし、それをつないでいく「骨格」



住戸の内外に姿を現す、構造体としての「骨格」。
個人の小さな時間を想定しながら設計し、「小さな時間」を家を構成する空間の単位として考える。
細かな空間には、それぞれの小さな時間が流れ、「骨格」がそれをつなぐ。

04-ii 設計　「骨格」に小さな時間が積み重なる

住人が変わっても時を超えて残し続ける「骨格」は時代の変化を見守りながら、住人の時間を積み重ねる。
次の住人に、新たな時代を迎合するための知恵を教えてくれる。
集合住宅内における「骨格」を介した関わりが生まれることで、暮らしの小さな時間の記憶がより残っていく。

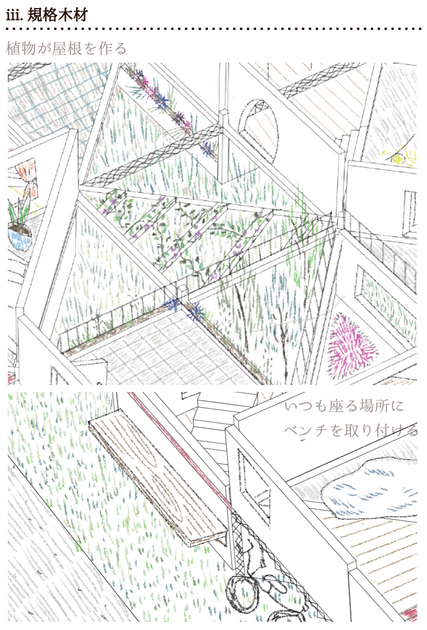
05 ディテール　素材により変化する「骨格」の使いこなし

住戸の内外に現れる骨格の素材には、以下の３つを使用する。
素材の「性質」は『使いこなし方』、「スパン」は『空間の物理的大きさ』、「部材の太さ」は『空間の印象』に変化を与え、骨格をもとに抑揚のある空間を作り出すことができる。
骨格から家具と建築が一体となったような使い方が生まれることで、建築に小さな時間が残っていく。

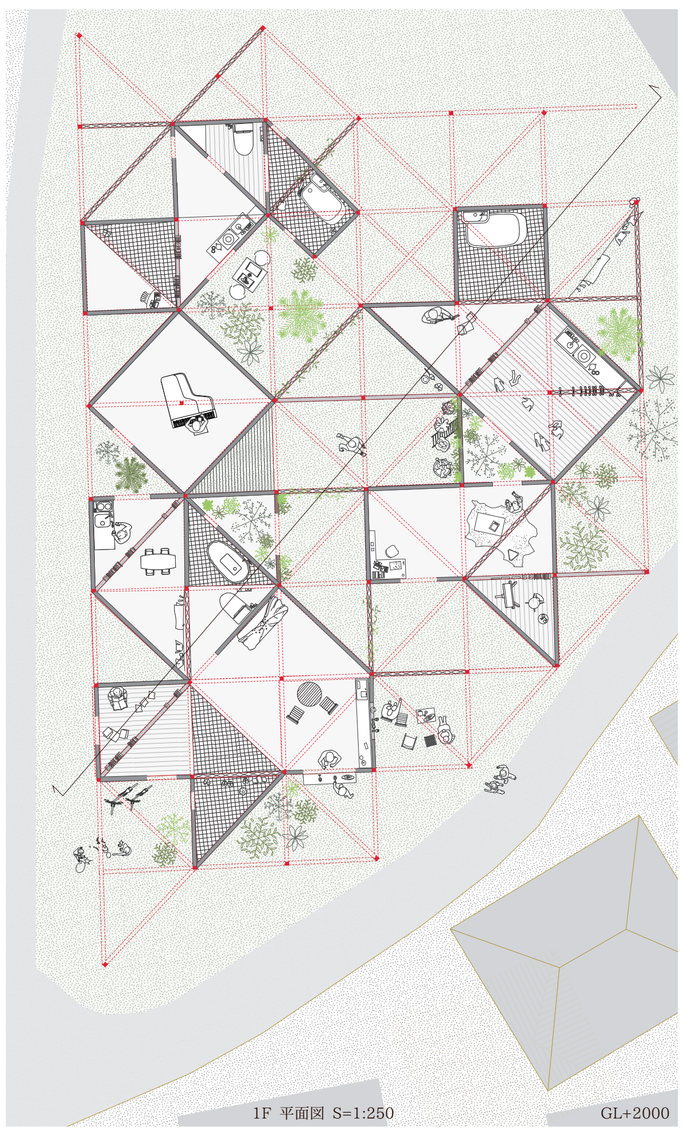
i. H 型鋼

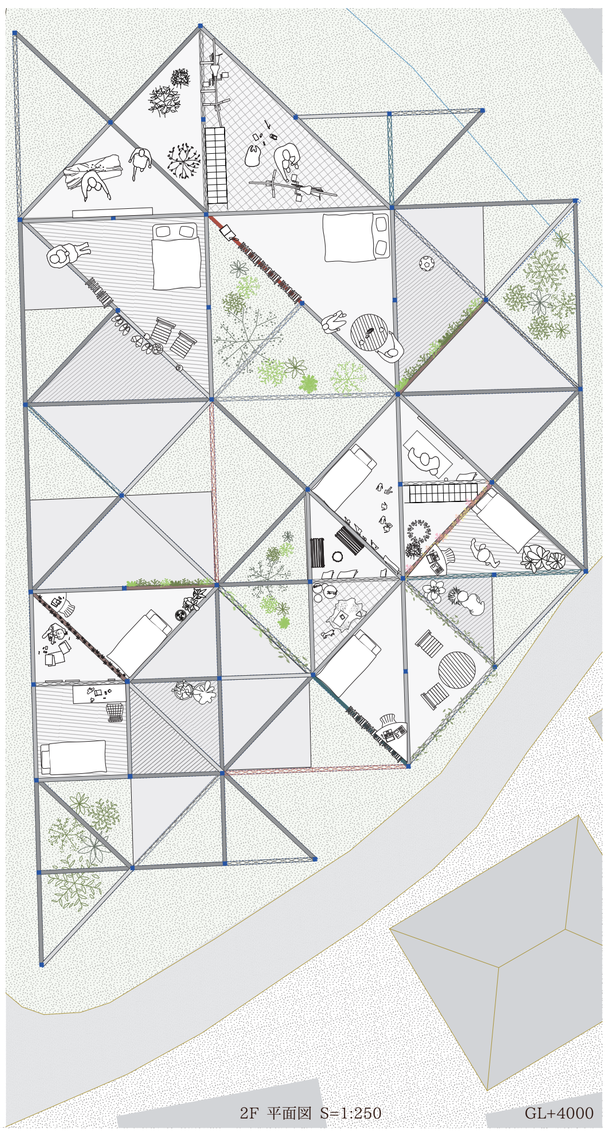
ii. ハブマイヤートラス

iii. 規格木材

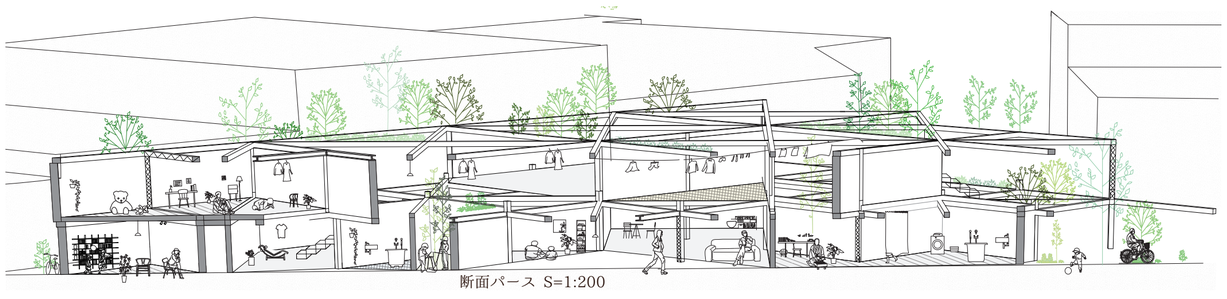


06 平面図　「骨格」から生まれる時間





07 断面図　「骨格」を介した小さな時間同士のつながり



断面パース S=1:200